

五百五十句

高浜虚子

青空文庫

序

さきに『ホトトギス』五百号を記念するために改造社から『五百句』という書物を出した。これは私が俳句を作りはじめた明治二十四、五年頃ころから昭和十年までの中から五百句を選んだものであった。先頃桜井書店から何か私の書物を出版したいとの事であったので、『ホトトギス』が五百五十号になった記念に、その後の私の句の中から五百五十句を選び出してそれを出版して見ようかと思いついた。思い立ってから大分日がたった。この月出ている『ホトトギス』は五百六十一号になっている。それはどうでもいいとして、昭和十一年から昭和十五年まで約六年間の間に五百五十句を選んだのであるから、前の『五百句』の約四十五年の間の句の中から五百句を選んだのに比較して見て少し精粗の別がないでもないが、要するに記念のための出版であつて、その他の事は格別厳密に考える必要もないのである。『五百五十句』という書物の名にしたけれども五百七、八十句になつたかと思う。それも厳密に考える必要はないのである。

私は本年古稀こきである。おのずか自ら古稀の記念ともなつたわけである。

昭和十八年五月十九日

鎌倉草庵にて

高浜虚子

註 改造社発行拙著『五百句』の百六十一頁「天の川」の句は取消す。

昭和十一年

鴨かもの中の一つの鴨を見てゐたり

一月二日 武蔵大沢浄光寺。
旭きよくせん川せん歓迎会。

枯れ果てしものの中なる 藤ふじ袴ばかま

一月四日 百花園偶会。水竹居、あふひ、花蓑、実花。

物売たもた侍たむた人も神の春

一月五日 武蔵野探勝会。目黒不動、大国家。

枯荻かれおぎに添かひ立たてば我わ幽すかなり

一月八日 謡俳句会。百花園。

渋しぶ引ひきししごとのど喉のど強かしい寒かん稽げ古こ

一月十八日 谷中やなかほんぎ本行寺ようじ。播磨屋はりまや一門、水竹居、たけし、立子、秀好。

古綿子ふるわたこ著きのみ著きのまゝ鹿島立かしまだち

二月十六日 楠窓東道なんそうの下に、章子を伴ひ渡仏の途に上る。午後三時横濱解纜箱根丸にて。

我心春潮にありいざ行かむ

二月十九日 神戸碇泊ていはく。花隈、吟松亭、関西同人句会に列席。

日本にっぽんを去るにのぞみて梅十句

二月二十一日 朝、門司著。萍子へいし招宴、三宜楼。

上シャンハイ海の震みぞる、波止場はとばあと後にせり

二月二十六日 箱根丸船中。

春潮や窓一杯のローリング

二月二十九日 朝、香港^{ホンコン}出帆。

顔しかめ居る印度人町暑し^{インド}

著飾^{きかざ}りて馬來女の跣足^{はだし}かな^{マレー}

裸なる印度ますらを幸^{さき}きくあれ

晚涼や 火焰樹並木斯くは行く

三月四日 新嘉坡著。石田敬二、東森たつを来訪。次で三井物産支店長
 松本季三志夫妻、三菱商事支店長山口勝、宮地秀雄等来船。敬二東道の下
 に章子を帯同、一路自動車にて奥田彩坡経営の士乃の護謨園を訪ふ。横
 光利一同道。帰途タンジヨン・カトンの玉川ガーデン、敬二居等に立寄
 り、今日の吟行地植物園に下車。それより空葉居に一憩、新喜楽にて晚
 餐。俳句会。

稲妻のするスマトラを左舷に見

三月五日 新嘉坡碇泊。日本人共同墓地に二葉亭四迷の墓を弔ふ。敬二、
 楠窓同道。章子は途中空葉居に下車。帰途敬二居に立寄り帰船。正午出帆。

稲田あり^ど あり日本に似たるかな

三月六日 彼南^{ベナン}著、上陸。

月も無く沙漠暮れ行く心細^{こころほ}そ

三月二十一日 午後三時、蘇士^{スエズ}入港。陸路カイロに到りメトロポリタン・
ホテル一泊。

寶石の大塊のごと春の雲

四月十九日 箱根丸にて楠窓、友次郎と協議の末、米国經由帰朝のことを

断念。午後、松岡夫妻、楠窓、町田一等機関士、章子、友次郎等とサンフ
リート村に花畑見物。

舟橋を渡れば梨花りかのコブレンツ

両岸の梨花にラインの渡し舟

梨花村の直ぐ上すじゆうにあり雪の山

四月二十一日 ライン河。

木々の芽や素すじゆう十住みけん家はどこ

四月二十一日 シュロツス・ホテル、バルコニーよりハイデルベルヒの町
を望む。

望楼ぼうろうある山の上まで耕され

四月二十二日 午後一時五分発、車中雑詠選に没頭。夜、ベルリン伯林著。三菱
商事藤室益三夫妻に迎へられ大和旅館に入る。沿道触目。

夜話やわつい遂に句会となりぬりラの花

四月二十四日 藤室夫人東道、日本人の学校参観、講演。「あけぼの」に
て昼食。それよりオリムピック敷地一見。カー・デー・バー百貨店に立寄
り帰宿。大毎社員加藤三之雄来訪。夜、三菱商事支店長渡辺寿郎邸にて晩

餐会。井上代理大使夫妻、孫田日本学会主事、藤室夫妻等と小句会。

春風や柱像屋根を支へたる

四月二十六日 渡辺夫人、藤室夫妻東道、ポツダムに赴く。恰も日曜日。
ポツダム宮殿。

箸で食ふ花の弁当来て見よや

四月二十六日 更に桜の名所ヴェルダーに車を駆る。藤室夫人携ふるところの日本弁当を食ふ。群衆怪しみ見る。

国境の駅の両替遅日ちしつかな

四月二十七日 藤室夫妻と再び日本人学校に赴き、日本人会にて昼食。午後一時五十分伊藤夫妻、迪子、バーミング、ビュルガ姉妹、京極、篠原、高田、寺井、昌谷、世良、仙石に送られツオ駅発、独蘭国境に向ふ。

ロンドン
倫敦の春草を踏む我が草履ぞうり

四月二十八日 朝七時前ハーウツチ港著。それより汽車にてリバプール・スツリート・ステーション著。上ノ畑楠窓、八田一朗、松本覚人、榎原覚、河西満薫、有ありよし吉義弥、高橋長春、常盤の主人岩崎盛太郎の出迎を受く。それより覚人君嚮きょうじやう導の下に楠窓、一朗両君と倫敦市中一見、デンマーク街の常盤本店にて休息。タフネルパークロードの常盤別館に入る。駒井権之助、朝日新聞社古垣鉄郎氏来訪。晚餐を待つ間小句会。

名を書くや春の野茶屋の記名帳

四月三十日 覚人東道、沙翁さおうの誕生地ストラットフォードに向ふ。楠窓、
一朗、友次郎、章子同行。

春の寺パイプオルガン鳴り渡る

四月三十日 シエクスピアほだいじ菩提寺。

売家を買はんかと思ふ春の旅

四月三十日 三時頃シエクスピア菩提寺より帰途に就く。

あしなえ
躋の妻を車に花に曳くひ

五月二日 キューガーデン吟行。同行者八田一朗、十時とじき春雄、伊藤東籬とうり、
有吉ありよし瓦楼がろう、森脇じょうじ襄治、大林、古垣鉄郎、池田徳真、榎原夫人、保柳夫
人、小野龍人、保柳才喜、小野静女、友次郎、章子。夕刻日本人会に戻り
食後披講。

にっぽん
日本の花の提ちようちん灯とともるもと

五月六日 朝九時、川村、伊藤、松本、河西夫人、八田、岩崎に見送られ
ヴイクトリア・ステーシヨン発、正午頃ドーヴァー駅著。英吉利イギリス船にて海

峽を渡り午後一時半頃フランス仏蘭西のカレー駅より乗車、五時頃パリ巴里著。上野に迎へられ直ちにマゼスチツク・ホテルに入る。アルフレッド・スムーラを帯同して松尾邦之助来訪、うち連れて佐藤醇造を誘ひヂュリアン・ヴオカンス訪問。晚餐。席にアルベール・ポンザンありて一同と共に仏蘭西のはいかい談に花を咲かせ記念撮影。ヴオカンス邸即興。

ハンカチの蝶と細りて尚なほ振れる

五月八日 午前十時、馬耳塞マルセイユ著。郵船会社に立寄り箱根丸乗船。山下馬耳塞領事乗船。四時出帆。友次郎は山下領事等と共に波止場に立ち長く見送る。港内にて清三郎乗船の筥崎丸はこざきまると行違ふ。

紅海に船早はや浮ぶ帰帆疾とし

五月十四日 スエズ運河通過、紅海に入る。

熱帯の海は日を呑み終りたる

この暑さ火夫や狂はん船やとまらん

五月十七日 紅海航行。暑さいよく劇し。

スコールの波窪まして進み来る

五月二十一日 初めてスコールに遇ふ。

亘^{わた}りたるリ才群島は屏風^{びようぶ}なす

鱒^{わに}の居る夕汐^{ゆうしお}みちぬ椰子^{やし}の涙

扇風機まはり熱風吹き起る

五月三十日 朝、新嘉坡入港。奥田彩坡、古根勲、森野熹由、山口勝、宮地義雄、志村空葉夫妻、玉木北浪来船。玉川園に行き日本人会に於ける俳句会に赴き、転じて森野の招宴に列し再び日本人会に赴く。深更帰船。

上^{シャン}海^{ハイ}の梅雨^{なつか}懐しく上陸す

六月八日 朝七時、上海著。堀場定祥、大内穠水、下村非文、星野露頭仏、

中田秋平、中原大鳥来船。上陸、南市の半^{ブーソンユ}淞園に行きそれより三菱商事の招宴にて月廼家にて田中三菱商事支店長等と会食。午後五時、閩北の新
 月花壇のすみれ会に列席。十一時から三菱銀行上海支店の竹内良男の説明
 にて、フランス租界八仙橋の黄金大戯場に支那芝居を^み観る。

船涼し左右に迎ふる对馬壺岐

六月十日 雑詠選了。对馬見え壺岐見え来る。大阪朝日九州支社より、帰
 朝最初の一句を送れとの電報あり。

戻り来て瀬戸の夏海絵の如し

六月十一日 朝六時甲板に立出で楠窓と共に朝^{あさ}靄^{もや}深く罩^こめたる郷里松山

近くの島山を指さし語る。

夏潮を蹶つて戻りて陸に立つ

六月十一日 神戸入港。名古屋の丹治蕪人、加藤霞村、加藤了谷、高松の村尾公羽、安藤老蔭。京都の松尾いはほ、平尾春雷、田中八重、田畑三千女、其他京阪神の諸君五、六十名の出迎を受く。蘆屋のとしを居に赴き晩餐。旭川、泊月に続いて『猿蓑』輪講のため三重史、大馬、涙雨、九茂茅、蘇城来り小句会。それより輪講に加はり午前一時頃帰船。

濁り鮎腹をかへして沈みけり

蠅よけもかぶせて猫は猫板に

六月十九日 家庭俳句会。発行所隣室にて。

朝顔の苗なだれ出し畚ふごのふち

六月二十二日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

籐椅子とういすにあれば草木花鳥来らい

我わが前に夏木夏草動き来る

七月十八日 風生招宴。
翹こうしまち町 永田町、逋信次官官邸。

月青くかゝる極暑ごくしよの夜の町

七月十九日 発行所例会。丸ビル集会室。

航海やよるひるとなき雲の峰

七月二十六日 大阪玉藻会投句。

眉目みめよしといふにあらねど紺浴衣こんゆかた

八月七日 家庭俳句会。愛宕山あたごやま、茶店。

麻の中雨すい〜と見ゆるかな

八月十四日 草樹会。丸ビル集会室。

秋の浪蹴^{けた}立^たて帰りし船ぞこれ

八月十八日 神戸にて友次郎帰朝を迎ふ。

宮様の今御成^{おなり}とや扇置く

八月十九日 甲子園朝日新聞社席に全国中等学校野球仕合を見る。

俳諧の忌日は多し萩の露

八月二十日 新大阪ホテルに在り。
旭川邸、元忌出句。

はる／＼と人訪ふ約や月の秋

八月二十日 神戸駅前相生町、三ツ輪亭南店に牛鍋をつつき、それより
泊月、鍋平朝臣、年尾、立子、友次郎と共に岡山に矢野蓬矢を訪ふ。

秋の風衣と膚吹き分つ

八月三十日 家庭俳句会。深沢、水竹居邸。七夕祭。

藻もの水に手をひたし見る沼の情

九月六日 武蔵野探勝会。成田山吟行、
印旛沼いんぱぬまを舟にて渡る。

一夜明けて忽たちまち秋の扇かな

よく見たる秋の扇のまづしき絵

庭石に蚊かやり遣置かしめ端居はしいかな

つくばひに廻まわり燈籠どうろの灯影ほかげかな

九月九日 水竹居招宴。越央子貴族院議員就任祝賀会。きん楽。

命かけて芋虫憎む女かな

九月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

秋^{あきあわせ} 裕 身を引締めて稽古^{けいこ}事

九月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。

目さむれば貴船^{きふね}の芒^{すすき}生けてありぬ

九月十七日 京都一泊。

必ずしも鯨はぜを釣らんとにはあらず

九月二十七日 水竹居招宴。永田青嵐主賓。築地つきじきん楽。

欄干によりて無月の隅田すみだがわ川

十月一日 偶ぐうせい成。

我が息を吹きとゞめたる野のわき分かな

飛んで来る物恐ろしき野分かな

十月三日 二百二十日会。清水谷公園、皆香園。

芭蕉忌や遠く宗祇そうぎに溯さかのぼる

十月十二日 笹鳴会。丸ビル集会室。

椀わんほどの竹生島ちくぶしま見え秋日和あきびより

茸山たけやまの少し曇れば物淋ものさびし

十月十五日 つるばみ会主催、近江国志賀郡真野村曼陀羅山松茸狩まんだら。年尾、

友次郎、王城、いはほ等と共に。

翡翠^{かわせみ}の紅一点につゞまりぬ

十月十五日 大津紅葉館別館にて晚餐。

帚^{ほうき}あり即ち^{すなわ}とつて落葉掃く

十月十六日 関西同人会。阪急沿線會根、星ヶ岡茶寮。

秋の水木會川といふ^な名にし^お負ふ

十月十八日 名古屋牡丹会大会吟行。日本ライン遊園地に向ふ。

きのこ
菌など山 幸多き台所

かけいね
掛稲に山又山の飛驒路かな

十月十九日 遠藤葦城東道。昨夜は飛驒下呂温泉、湯の島旅館宿泊。今朝
高山に行く。角正にて精進料理。

げてもものは嫌ひで飛驒の秋は好き

十月十九日 げてもものは白川郷が本場なりとのこと、げてももの展覽会場
あり。

今の世も月明かに百年忌あきり

十月二十四日 池上いけがみ本門寺ほんもんじ。三世中村歌右衛門建碑式。歌右衛門肖像画に賛。

叡山えいざんの秋深かりし思ひ出で

十一月一日 往年横川中堂よかわにてはじめて渋谷慈鑑じがいに邂逅かいこう。今は京の真如堂の住職。その還暦祝に句を徴されて。

手をたゝき婢ひを呼びづめや風邪かぜの妻

十一月九日 大崎会。丸ビル集会室。

御神鬮おみくじの凶あやむが出でたる落葉降る

十一月二十一日 木の芽会。鬼子母神境内きしぼじん。吉右衛門邸にて披講。

人に恥はぢ神には恥ぢず 初詣はつもうで

神は唯みそなわ戀すのみ初詣

推し量る神慮かしこし初詣

十二月七日 偶成。

雪の暮茶の時ときより頼よりに句の常世つねよ

十二月十日 大正五、六年頃か、鎌倉能楽堂にて「鉢木はちのき」を演ぜし時川越守男ワキを勤めくれたり。其後茶掛ちやかけに句を所望せられたるに書きたる句を打ち忘れ居たるを近藤いぬる先頃川越の茶会に招かれ其軸を示されたるを覚え来れりとして教へくれたるもの。川越は久田家の茶の宗匠なり。

焚火消え一夜の宿あるじの主なし

十二月十一日 柚木湘水追悼句。嘗かつて湘水亭に一泊せしことあり。

枯芭蕉棒もたしかけありにけり

十二月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

羽子板を咬^{くわ}へ去る犬別荘へ

十二月二十五日 鎌倉俳句会。大仏境内、南浦園。

昭和十二年

日ねもすの風かざはな花淋はなしからざるや

一月二日 武蔵野探勝会新潟行。篠田旅館泊。みづほ、素十等の歓迎を受
く。

春著はるぎの妓右この袂たもとに左の手

一月四日 二百二十日会。きん楽。

七草に更に嫁菜よめなを加へけり

一月七日 川崎利吉息安雄結婚披露。

加留多カルタとる皆美しく負けまじく

双六すごろくに負けおとなしく美しく

一月八日 草樹会。丸ビル集会室。

太陽を礼讃らいさんしてぞ日向ひなたぼこ

倫敦ロンドンの濃霧の話日向ひなたぼこ

伊^イ太^タ利^リの太^タ陽^{リョウ}の唄^{ウタ}日向^{ヒナタ}ぼこ

一月十一日 友次郎と共に鎌倉駅にて電車を待つ間偶成。

画^エ家^カ去^クりぬ 嬌^{エン}然^{ゼン}として梅^{ウメ}の花

一月十五日 家庭俳句会。小石川植物園。

マ^マスクして我^ワと汝^ニで^デありし^シかな

一月二十三日 青^{セイ}郵^ユ送^{ソウ}別^{ベツ}を兼^{ケン}ね在^{アイ}京^{キョウ}同^{ドウ}人^{ジン}会^{カイ}。向^{ムコウ}島^{ジマ}弘^{コウ}福^{フク}寺^ジ。

羽ひらきたるまゝ流れ 寒かんがらす 鴉

鳴くたびに枝踏みゆるゝ寒鴉

一月二十五日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

化粧して気分すぐれず春の風邪

一月二十八日 丸之内倶楽部俳句会。

そのまゝに君紅梅の下に立て

一月三十一日 深沢、水竹居邸。青郵送別会。実花あり。

客ありて梅の軒端のきばの茶の煙

二月七日 武蔵野探勝会。相州下曾我梅林。加来金升邸。

御靈屋おたまやに枝垂梅しだれうめあり君知るや

二月十九日 家庭俳句会。芝公園蓮池。

かりそめの情は仇あだよ春寒し

二月二十一日 発行所例会。丸ビル集会室。

雛^{ひな}の顔鼻無きがごとつるくと

三月五日 家庭俳句会。渋谷桜ヶ丘、遠藤蕙城邸。

折りく^なて尚^お花多き宮椿

三月七日 武蔵野探勝会。武州大沢梅林。

一枚の葉の凜^{りん}として挿木^{さしき}かな

三月八日 大崎会。丸ビル集会室。

雨晴れておほどかなるや春の空

三月十四日 謡句会。

たとふれば独こ樂まのはぢける如くなり

三月二十日 『日本及日本人』 碧梧桐追悼号。 碧梧桐とはよく親しみよく
争ひたり。

婢下ひげほく僕走り出迎へ花の荘

四月二日 家庭俳句会。葉山、平、畠山別邸。

別荘を出て別荘へ花の坂

幹太く大いなるかな 家いえざくら桜

四月八日 七宝会。大磯、高木別邸。

花の如く月の如くにもてなさん

四月九日 田中家新築披露扇の句。女将に代りて。

畦^{あぜ}を塗^ぬる鋤^{くわ}の光をかへしつゝ

畦塗^{あぜぬ}るや首^{くび}をかしげ^かて懇^{ねんご}に

四月十二日 大崎会。丸ビル集会室。

さま／＼の情のもつれ暮の春

四月十八日 発行所例会。

折^おの蓋^{ふた}取れば^と圧^おされて^ら 柏^{かしわ}餅^{もち}

四月二十三日 鎌倉俳句会。葉山、水竹居山荘。

熊蜂くまばちのうなり飛び去る棒のごと

四月二十六日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

馬酔木折つて髪かみに翳かげせば昔めき

重の内あたか暖かにして柏餅

五月六日 二百二十日会。銀座六丁目、実花宅。

目立たぬや同じ色なる更ころもがえ衣

五月十日 笹鳴会。丸ビル集会室。

麦の穂の出揃でそろふ頃のすがくし

五月十三日 七宝会。武蔵境むさしきかい、望田邸。

鯖さばの旬しゆん即ちこれを食くひにけり

五月十四日 草樹会。丸ビル集会室。

此宿はのぞく日にちりん輪かさへも黴かび

えにしだの黄色は雨もさまし得ず

五月十六日 発行所例会。丸ビル集会室。

たゝみ来る浮葉うきはの波のたえまなく

五月二十一日 家庭俳句会。水竹居祝賀。不忍池畔雨月荘。

時ときじくぞ雨は降りける 更ころもがえ衣

五月二十四日 「玉藻十句集（第四回）」

老人や夏木見上げてやすらかに

六月五日 水竹居祝賀会。築地、きん楽。

藻の花や母娘おやこが乗りし沼渡舟ぬまわたし

六月六日 武蔵野探勝会。我孫子あびこ、谷口別邸。

桑の実や父を従へ村娘

六月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

見るうちに薔薇ばらたわくと散り積る

六月十四日 大崎会。丸ビル集会室。

急いそがしく煽あおぐ団扇うちわの紅は浮く

六月十七日 白草居自祝招待会。とんぼ。

昂然こうぜんと泰山たいさんぼくの花に立つ

六月十九日 白草居退職祝賀会。日比谷松本楼。

玉虫の光を引きて飛びにけり

六月二十日 発行所例会。丸ビル集会室。

料理屑くず流れ行くあり船料理

六月二十四日 丸之内倶楽部俳句会。

三等待まちあい合あい昼寝の男起き上り

七月三日 家庭俳句会。東京駅附近写生。発行所にて披講。

親竹に若竹添へて三幹竹

七月三日 『山彦』五周年記念句会。三信ビル。

ユーカリを仰げば夏の日幽か

七月十一日 二百二十日会。鎌倉、瑞泉寺。

引いて来し夜店車をまだ解かず

七月十四日 銀座探勝会。松屋裏、観音堂。

這はひよれる子こに肌はだぬ脱ぬぎの乳ちぶさ房さあり

肌はだぬぎし如ごとく衣えもん紋もんをいなしをり

七月十八日 発行所例会。丸ビル集会室。

へこみたる腹はらに臍へそあり水みず中あたり

七月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。

月あれば夜よを遊あそびける世よを思おもふ

七月二十四日 夜、偶成。

颯たいふう風の名残なごりの驟しゅうう雨あまたゝび

七月二十六日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

大敷おおしきの網あみに夏海大うねり

泳およぎ子の潮たれながら物もの捜さがす

釣堀つりほりの日蔽ひおひの下の潮青し

八月一日 武蔵野探勝会。真まなづる鶴、日本水産会社大敷網。

避暑の浜や稍やさびれたる花火かな

八月八日 五月雨会。水神八百松。

夏山やよく雲かゝりよく晴るゝ

八月二十五日 箱根町、箱根ホテル。

松か魚つ舟お子ぶ供ね上りの漁夫もゐる

九月五日 武蔵野探勝会。芝区海岸通り、日本水産株式会社冷凍部芝浦工

場。

屋根裏の窓の女や秋の雨

九月十日 銀座探勝会。
木挽町三丁目河岸、朝日倶楽部。

稲妻をふみて跣足の女かな

九月十一日 二百二十日会。丸ビル集会室。

子の忌日妻の忌日も戈の秋

九月十九日 大連だいらんの吉田弧岳、亡妻三周年の忌日も内地に帰れず事變の
為ため足留めをくひ居れり、亡長男の七周年忌日が丁度子規忌当日なりと申
越しければ。

聳そびえたるお西お東月の屋根

九月二十七日 「玉藻十句集（第八回）」

此谷を一人守れる案山かがし子かな

十月十一日 笹鳴会。丸ビル集会室。

力なく毛見けみのすみたる田を眺めなが

十月十一日 大崎会。丸ビル集会室。

老人と子供と多し秋祭

十月十五日 家庭俳句会。氷川神社ひかわ、あふひ居。

落花生喰くひつゝ読むや罪と罰

十月十六日 発行所例会。丸ビル集会室。

実をつけてかなしき程の小草かな

十月二十七日 「玉藻十句集（第九回）」

目つむれば今日の錦の野山かな

十月三十一日 阪神線甲陽園播半。ましこ招宴。

智照尼は昔知る人薄紅葉

今も亦一時雨あり薄紅葉

十一月三日 京都牧野滞在。光悦寺に行き、
祇王寺を訪ひ嵐山に遊ぶ。

月の子はかぐや姫にはあらざりき

十一月八日

旭きよくせん川

より桜坡子はじめて男子を得しとのこと言ひ来る。

返事に、ついで序あれば桜坡子に言つてよとて。

秋天に赤き筋ある如くなり

秋空や玉の如くにようえい揺曳す

十一月十日 銀座探勝会。松屋裏尼寺。

静さに耐へずして降る落葉かな

十一月十四日 臨時句謡会。あふひ邸。

佇^{たたず}める人に菊花のうつ伏せり

人去りて冷たき石に倚^よれる菊

十一月十九日 家庭俳句会。杣^{そま}男山荘。

酔^よひたはれ握る冷たき老の手よ

身の上に法^{ひや}冷^やかに来りけり

十一月二十二日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

一足の石の高きに登りけり

十一月二十四日 二百二十日会。鎌倉山、千穂山荘。

柴漬ふしづけの悲しき小魚こうおばかりかな

雑炊ぞうじや後生ごしょうだいじ大事だいじといふことを

十一月二十五日 丸之内倶楽部俳句会。

枯るゝ庭ものの草紙そうしにあるがごと

黒きしみつとあり五郎兵衛柿ごろうべえがきとかや

此庭も夫唱婦隨の枯るゝまゝ

十一月三十日 風生居招宴。

鼻の上に落葉をのせて緋鯉ひこい浮く

落葉敷く荒波を敷く如くなり

十二月二日 家庭俳句会。植物園写生、椎花邸招宴。

牛立ちて二三歩あるく短き日

十二月五日 武蔵野探勝会。横浜在子安、
子安農園。

鉄板を踏めば叫ぶや冬の溝

十二月八日 銀座探勝会。松屋裏、尼寺。

砲火そゞぐ南^{ナンキン}京城は炉の如し

かゝる夜^よも将士の征衣霜深し

寒紅梅 馥郁ふくいくとして招魂社

十二月九日 東京朝日新聞社より南京陥落の句を徴されて。

女を見連れの男を見てしわす師走

十二月十一日 二百二十日会。松坂屋写生、実花居。

我生や今日の短き日も惜しゝ

十二月十三日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

首卷もせよ祝つても貰ふべし

十二月十五日 風早浦の人還曆祝の句を認むとて。

話のせて車まつしぐら暮の町

十二月十七日 家庭俳句会。あふひ邸。

かる／＼と上る目出度し餅の杵

十二月十八日 発行所例会。丸ビル集会室。

冬日ふゆゆわら柔か冬木柔か何れぞやいず

冬木中生徒の列の現れ来く

十二月二十二日

『立子句集』出版記念会。上野公園梅川。

寒雨降りそゞげる中の枝垂梅しだれうめ

冬麗うらら花は無けれど枝垂梅

十二月二十四日

鎌倉俳句会。

要かなめやま山、香風園。

行年ゆくとしや歴史の中に今我われあり

十二月二十五日 句謡会。向島百花園、千歳。

昭和十三年

初句会浮世話をするよりも

一月一日 旭川、年尾、友次郎と共に初句会。

肅々と群聚はすゝむ 初詣はつもうで

清浄しようじようの空や一羽の寒鴉かんがらす

一月二日 武蔵野探勝会。明治神宮初詣。日本青年館。

棲つまとりて独ひとり静しずかに羽は子ねをつく

一月三日 向島弘福寺。旭川、秋琴女歓迎。

焚たき火びかなし消えんとすれば育てられ

追おい羽ば子ねのいづれも上じょう手ず姉妹

一月七日 家庭俳句会。百花園、千歳。

せはしなく暮れ行く老の短き日

一月八日 二百二十日会。木挽町、田中家。

爛々らんらんと暁あけの明星うきねどり浮寝鳥

一月十日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

水餅みずもちの壺つぼの蓋ふたとる窓明り

一月十四日 草樹会。丸ビル集会室。

寒肥かんごえを皆やりにけり梅桜

春水しゅんすいや子こを抛ほうる真似まねしては止やめ

一月二十一日 家庭俳句会。日比谷公園。

人形の前に崩れぬくず寒牡丹かんぼたん

何事の頼みなければれど春を待つ

一月二十四日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

床とこの花すで已すでに古びや松の内

一月二十七日 「玉藻十句集（第十二回）」

畦あぜ一つ飛び越え羽搏はうつ寒鴉

凍いてづる鶴の首を伸のぼして丈高たけき

一月二十七日 丸之内倶楽部俳句会。

焚火なきけしてくれる情なさけに当りもし

一月三十日 句謡会。百花園、千歳。

旗のごとなびく冬日をふと見たり

二月四日 家庭俳句会。小石川植物園。

小ぎつぱりしたる身なりや
針納はりおさめ

町娘え笑みかはし行く針供養

二月七日 二百二十日会。白山招宴。銀茶寮。

病にも色あらば黄や春の風邪

二月十二日 草樹会。丸ビル集会室。

猫柳又現はれし漁翁かなぎよおう

二月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。

春宵しゅんしょうをあだに過ぎなば悔くいあらん

二月十五日 奈王招宴。新橋灘なだまん万。

猫柳ほゝけし上にかゝれる日

うしほ今和布めひんがしを東ひんがしに流しをり

潮の中和布を刈る鎌の行くが見ゆ

二月十九日 発行所例会。丸ビル集会室。

提^{ちようちん}灯の照らせる空や夜の梅

二月二十日 鳴雪十三回忌を修す。丸之内倶楽部日本間。

橋に立てば春水我に向つて来

三月六日 武蔵野探勝会。和田堀、明治大学、本願寺墓地等。

煎^いつてゐる雛^{ひな}のあられの花咲きつ

遠ざけて引寄せもするはるひおけ春火桶

三月七日 二百二十日会。銀座五丁目東仲通、菊の家。

けいちっ啓蟄や日はふりそゞぐ矢の如く

三月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

桜貝波にもものいひ拾ひ居る

おほろよ朧夜や男女行きかひくくて

三月二十四日 丸之内倶楽部俳句会。

竹林に黄なる春日はるひを仰ぎけり

藁屋根に春空青くそひ下る

三月二十五日 鎌倉俳句会。名越なごえ、立正安国論寺。

鬱々うつうつと花暗く人病みにけり

四月三日 武蔵野探勝会。神代村じんだい、深大寺じんだいじ。

彼の女かはるひ春日まぶしく瞬またたけり

四月四日 二百二十日会。深沢、水竹居邸。

肴さかなくまないた屑俎くずにあり花の宿

語り伝へ謡ひ伝へて梅うめわかき若忌

忌日きじつあり碑あり梅若物語

四月十一日 大崎会。富士見町、三輪女邸。

垣外かきそとの暮春の道の小さくよ

四月二十一日 鎌倉俳句会。山の内、浄智寺。

遠足の野路の子供の列途とぎ切れ

四月二十五日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

手を上げて別るゝ時の春の月

四月二十八日 「玉藻十句集（第十五回）」

杉落葉して境内の広さかな

四月二十八日 丸之内倶楽部俳句会。

春はる 闌たけなわ 暑なつしといふは勿体なし

五月一日 武蔵野探勝会。小石川後楽園、かんとくてい 涵徳亭。

分け行けば躑躅つづじの花粉袖そでにあり

五月六日 家庭俳句会。駒込こまごめ、六義園りくぎえん。

夏なつ暖簾のれん垂しずれて静かに紋もんどころ所

五月十三日 銀座探勝会。松屋七階貴賓室。

バスの棚たなの夏帽のよく落おちること

五月十七日 佐渡に一遊。

校服の少しょうじょ女汗あせくさく活かつ澆ぽつに

六月三日 家庭俳句会。日比谷公園。

鶉うの森のあはれにも亦また騒さわがしく

六月五日 武蔵野探勝会。千葉在大巖寺、鶉の森。

新しき蚊帳板のごと釣られけり

六月十日 草樹会。丸ビル集会室。

梅雨傘をさげて丸ビル通り抜け

六月十七日 家庭俳句会。丸ビル写生。

欄干に江山低し蚤ふるふ

六月十八日 発行所例会。丸ビル集会室。

休んだり休まなんだり梅雨工事

六月二十日 田中家招宴。

我^{わがおも}思ふまゝに子^{ぼうから}子うき沈み

六月二十三日 丸之内倶楽部俳句会。

箱庭の月日あり世の月日なし

己^{おの}が羽^{はね}の抜けしを^{くわ}脚^{くわ}へ羽^は拔^ぬけ^けど^り鳥

六月二十四日 鎌倉俳句会。深沢村、寺分、陣出園温泉宿。

聞えざる涼み芝居を^{ただ}唯見^{ただ}をり

七月四日 二百二十日会。浅草仲見世、万屋。女剣劇大江美智子一座。

桃葉湯^{とう}丁^{よう}稚^{とう}つれ^でたる^{つち}御寮^ご人^{りょうにん}

滴^{した}りの岩屋の仏花奉^たる

七月八日 草樹会。丸ビル集会室。

句拾ふや芒すすぎさゝやき露語る

蕘しべの朱が花卉にしみて孔雀くじゃくそう草

虻あぶと蝶向合ひすがる九階くがいそう草

七月九日 句謡会。百花園、千歳。

雑沓ざつとくの中に草市立つらしき

七月十二日 銀座探勝会。東海堂屋上、朝顔を見る。ついで東海堂主人の

本宅に招ぜらる。

泣きじやくりして髪洗ふ娘かな

喜びにつけ憂きにつけ髪洗ふ

七月二十五日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

端居して垣の外面の世を見居る

七月二十七日 「玉藻十句集（第十八回）」

晩涼や謡の会も番すゝみ

八月二十一日 あるじ慰問、句謡会。本田あふひ邸。

破れ傘^{やぶがさ}さして遊ぶ子秋の雨

病人に野分^{のわき}の夜を守りけり

九月一日 家庭俳句会。あふひ居。

棟並^なめて早稲田大学秋の空

九月七日 七宝会。小石川高田豊川町、田原久吉邸。

友を葬る老の残暑の汗を見る

面おもやつれしてかつくと夜食おもかな

九月九日 草樹会。丸ビル集会室。

夜半よわに起き娘こが宿とを訪とふ野分なかな

九月十二日 笹鳴会。丸ビル集会室。

紫蘇しその実みを銚はさみの鈴すずの鳴りて摘とむ

九月十六日 家庭俳句会。あふひ邸。

砧きぬたばん盤ばんあり差さし出いだす灯の下に

山河やまがわこゝあつまに集まり来きたり下くだり簾やな

九月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。

秋風や心の中の幾山河

九月二十九日 「玉藻十句集（第二十回）」

一面に月の江口えぐちの舞台かな

目まのあたり月の遊女の船遊び

十月二日 武蔵野探勝会。
宝生ほうしょう能楽堂に野口兼資かねすけの「江口」を観る。

もの置けばそこに生れぬ秋の蔭

十月三日 二百二十日会。木挽町、田中家。

何某なにがしに扮ふんして月に歩きをり

すべから
須く月の一句の主たれあるし

十月八日 観月句会。大船、松竹撮影所。

たし
嗜まねどあたた温め酒はよき名なり

十月十日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

ゆうやみ
夕闇ろてきの蘆荻音なく舟著つきぬ

十月十五日 発行所例会。丸ビル集会室。

肌寒はださむも残のこる寒さも身一つ

十月二十日 一行の中に年尾も加はり、高松栗りつりん林公園内、掬きく月亭俳句会。此夜高松古新町かしく泊。善通寺に正一郎伍長を訪ふ。

歴史悲し聞いては忘る老の秋

十月二十一日 屋島に遊ぶ。

病床の人訪ふたびに秋深し

十月二十五日 家庭俳句会。あふひ居。

並びお陥カントンつ 広東ぶかん武漢秋二つ

悦よろこびおのに戦のく老ぬくの温め酒

十月二十五日 東京朝日新聞よりもと需めらるゝまゝに武漢陥落を祝す句のうち。

真東に向はしめたる像の秋

これよりや時しぐれ雨落葉と忙がしき

十一月三日 武蔵調布上布田ふだ三〇四、新田霞霧園隣地、虚子胸像除幕式。

つやゝかな竹の床しょうぎ几を菊に置く

十一月六日 武蔵野探勝会。
小金井こがねい、大正園。

我われ静ずかなれば蜻蛉とんぼう来てとまる

十一月七日 二百二十日会。清水谷公園、皆香園。

凍いてちよう蝶まゆの眉高々とあはれなり

十一月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。

てぬぐい
手拭にうち払ひつゝ夕時雨

十一月二十六日 「玉藻十句集（第二十二回）」

たきび
焚火そだてながら心は人を追ふ

めて
右手は勇
ゆんで
左手は仁や
ふところ
懐手

十一月二十八日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

大枯木己が落葉を慕ひ立つ

十一月三十日 比古、立子、ていしよ汀女、香雲と共に小石川植物園。

焚火そだてゐたりしが立ち歩み去る

十二月二日 家庭俳句会。あふひ邸。

枯萩の立ちよれば粗に遠のけば

掃きしあと落葉を急ぐ大樹かな

十二月四日 武蔵野探勝会。小石川植物園。共同印刷会社三階会議室。

うらむ気は更にあらずよ冷たき手

十二月九日 草樹会。丸ビル集会室。

草庵そうあんに 温おんじやく石いしの 暖ただ唯一ただつ

十二月十日 句謡会。あふひ邸。

老おいはもの何か忙いそがし短ひだりき日ひ

十二月十二日 笹鳴会。丸ビル集会室。

白眼に互に日向ひなたぼこりかな

十二月十二日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

襟えりまき巻まきに深く埋うずもれ 帰去来かえんなん

十二月十八日 和歌山市外三田和田、竈かまやま山神社献句式帰路車中。

山端やまばなは寒し素逝そせいを顧みし

十二月十九日 京都山端平八に行く。素逝、王城、比古、年尾、紫尹と共に。

背布団狎せなぶとんちんに著せ紐きひも長く持ち

十二月二十日 京きょう 饌寮せん。王城、比古、三千女と共に。

金屏きんびょうにともし火の濃きところかな

十二月二十一日 「玉藻十句集(第二十三回)」

昭和十四年

初詣はつもうで 神慮は測り難けれど

願ねぎ事ことはもとより一つ初詣

一月一日 明治神宮初詣。

雲乱れ霰あられ忽たちち降まり来り

一月八日 武蔵野探勝会百回記念。鎌倉鶴ヶ岡八幡宮初詣。海浜院。

龍の玉深く蔵すといふことを

一月九日 笹鳴会。丸ビル集会室。

大寒にまけじと老の起居かな

一月十三日 草樹会。丸ビル集会室。

悴める手は憎しみに震へをり

一月十六日 二百二十日会。京橋、灘万。蓬矢招宴。

花のごと流るゝ海苔のりをすくひ網

一月十九日 物芽会。品川、洲崎館。

其中に境さかいがき垣がきあり冬木立

一月二十日 家庭俳句会。あふひ邸。

女おんな礼なれい者しやらしく古風につましく

一月二十三日 玉藻句会。丸ビル集会室。

藪^{やぶ}入^{いり}や母^{はは}にいはねばならぬこと

一月二十五日 「玉藻十句集（第二十四回）」

石はうる人をさげすみ 寒^{かん}鴉^{がらす}

紅梅の旧正月の門^{かど}辺^へかな

一月二十六日 丸之内倶楽部俳句会。

寒^{ゆえ}き故^{ゆえ}我等四五人なつかしく

一月三十日 京都南禅寺瓢亭。いはほ招宴。いはほ、静子、王城、野風呂、

雨城、のぶほ、千代子、比古。

暮れて行く枯木も加茂の御社も

一月三十一日 下鴨、糺の森。木屋町大千賀。王城等鹿笛同人招宴。年
尾と共に。

取り乱し人に逢はざる風邪寝かな

かぼそくも打臥しおはす風邪寝かな

二月六日 二百二十日会。白山招宴。銀茶寮。

冴^さえかへるそれも覚悟のことなれど

二月十日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

春の波小さき石に一寸躍^{ちよとおど}り

二月十二日 日本探勝会第一回。蒲^{がまごおり}郡、常磐館にて。

茶房^{さぼう}暗し 春^{しゅん}灯^{とう}は皆隠しあり

二月十四日 銀座探勝会。西銀座、レデー・タウン。

春^{しゅん} 水^{すい}をたゞけばいたく窪^{くぼ}むなり

二月十六日 物芽会。清水谷公園、皆香園。

ついで来る人を感じて長閑^{のどか}なり

二月十七日 家庭俳句会。本田あふひ邸。

雪の果^{はて}これより野山大いに笑ふ

二月十八日 発行所例会。丸ビル四階、水産倶楽部。

春水に歩みより頭ずをおさへたる

二月二十四日 鎌倉俳句会。鶴ヶ岡八幡社務所。

紅梅の京を離れて住むは厭いや

二月二十五日 「玉藻十句集（第二十五回）」

春しゅん雲うんは柵たなび曳き機婦は織り止やめず

そこを行く春の雲あり手を上げぬ

緑竹りよくちくの下やそゞろに青む草

三月四日 句謡会。鎌倉、香風園。

花まばらおぎさはら小笹原なる風の梅

三月五日 日本探勝会。伊豆大仁いずおおひと、大仁温泉ホテル。葑城会主。

たとふればすみ田の春のゆきしごと

三月九日 蚊杖ぶんじょうを通じ、老年にて身まかりたる名女将やなぎといはれし柳橋ばし林家女将追福の通袱紗ふくさに句を乞はれて。

物の芽にふりそゞぐ日をうち仰ぎ

三月十四日 夜。大崎会。丸之内倶楽部別室。

運命は笑ひ待ちをり卒業す

三月十八日 発行所例会。丸ビル四階、水産倶楽部。

春寒はるさむもいつまでつゞく梅椿

三月二十二日 偶成。

土手の上に顔出し話す草を摘む

三月二十三日 丸之内倶楽部俳句会。

春しゅん草そうのこの道何かなつかしく

三月二十四日 鎌倉俳句会。明月院。

初蝶を夢の如くに見失ふ

三月二十九日 玉藻花鳥会。小石川植物園。

くもりたる古鏡の如し
朧おぼろづき月

四月四日 一江招宴。日本橋、浜田家。

黄いろなる真赤なるこの木瓜ぼけの雨

細き幹伝ひ流るゝ木瓜の雨

四月六日 二百二十日会。鎌倉浄智寺、灘万別荘。おはん東道。

立上りしこう而して歩む春惜しむ

四月二十四日 玉藻俳句会。丸ビル四階水産倶楽部。

草餅をつまみ江山遥なり

四月二十六日 「玉藻十句集（第二十七回）」

黒虻の尻の黄色が逆立ちぬ

五月六日 句謡会。鎌倉、香風園。

昔こゝ六浦とよばれ汐干狩

五月七日 日本探勝会。武州金沢かなざわ、金沢園。

道々の余花よかを眺ながめてみちのくへ

余花よかに逢あふ再び逢あひし人のごと

五月十三日 仙台俳句会兼題をおくる。

かはほりや窓の女をかすめ飛ぶ

五月十六日 青邨帰朝歓迎会。向島弘福寺。

麦飯もよし 稗飯ひえめしも辞退せず

五月十七日 丸之内倶楽部俳句会。

面つゝむ津軽つがるをとめや 花林檎はなりんご

五月二十五日 風生等と共に仙台俳句会に臨み、
 帰路大鰐に手古奈に会す。加賀助旅館。
 小樽おたるに高木一家を訪ひ、

代馬しろうまは大きく津軽富士小さし

五月二十六日 猿賀村、猿賀神社吟行。

みちのくの旅に覚えし薄暑かな

五月二十六日 大館おおだてを経て湯瀬温泉に至る。

夏の月かゝりて色もねずが関

五月二十七日 湯瀬出発、尾去沢おざりざわ鉦山一見、花輪に出で、瀬波温泉に向ふ。瀬波温泉にて、みづほ、素十等に会す。

浜茄子はまなすの丘あとを後にし旅つゞく

五月二十八日 村上在、瀬波温泉、三島家旅館。

葡萄ぶどう槽ぼだちよろ／＼燃えて夏炉かな

煙管きせるに火つけて夏炉にかしこまる

五月二十八日 亀田、綾華居。

相語り池の浮葉もうなづきぬ

五月三十一日 紅こう緑ろく上京。肋骨、鼠そ骨こつと四人、不しの忍はず、笑福亭に会す。

任重く心軽しや 更ころも衣がえ

六月二日 吉田週歩の満洲に行くを送る。

梅雨晴間打水しある門に入る

六月八日 七宝会。近藤いぬる邸。

供華のため畦に芍薬 つくるとか

六月十日 昨夜、夜汽車にて上野を発す。朝六時八分三日市著。直ちに黒部鉄道にて宇奈月に行く。延対寺泊り。蓬矢知事東道。

岩の上の大夏木の根八方に

夏山やトロに命を托しつゝ

雪溪の下にたぎれる黒部川

六月十一日 黒部峡探勝。

汝^{なれ}にやる十二単衣^{ひとえ}といふ草を

六月十一日 黒部峡探勝。つき来りし宿の婢に。

虫虻^{むしけら}と侮^うられつゝ生を享^うく

六月十六日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

遠目にはあはれとも見つ栗の花

梅雨といふ暗き頁の曆かな

六月十七日 発行所例会。丸ビル四階、水産倶楽部。

夏風邪はなか／＼老に重かりき

七月一日 句謡会。鎌倉、香風園。

祖おやを守りも俳諧を守りもり守武たけき忌

七月六日 朝日新聞の需もとめにより。開戦記念日を迎ふる句のうち。

船揺れて瓶花へいか傾く涼しさよ

七月二十二日 日本探勝会。鎌倉丸乗船。有馬ありま行。午後零時三十分出帆。

崖がけぞひの暗こき小部屋こべやが涼しくて

七月二十三日 有馬温泉、兵衛旅館。

此上は比叡ひえいの座主ざすの秋を待つ

八月十四日 渋谷慈鑑じがい真如堂より 毘沙門堂びしゃもん門跡もんぜきに榮転せられしを祝す。

打水をよろめきよけて 病やまい犬いぬ

九月二日（二百十日） 句謡会。鎌倉、香風園。

松の月暗しくと 轡くつわむし虫

九月八日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

秋風やうかとしてゐし一大事

九月十二日 二百二十日会。清水谷、皆香園。

秋風は芙蓉ふようの花にやゝあらく

九月十三日 七宝会。市公園となりし百花園。

見苦しや残る暑さの久しきは

三日月のにはやかにして情なさけあり

九月十五日 大崎会。丸之内倶楽部特別室。

老松おいまつの己おのれの露つゆを浴あびて濡ぬれ

老松おいまつに露つゆの命いのちの人ひと往来ゆきき

老松おいまつのたゞ知る昔秋むかしあきの風かぜ

九月二十二日 鎌倉俳句会。戸塚在、旧東海道松並木、老松茶屋。

母ははを呼よぶ娘むすめや高原こうげんの秋澄あきすみみて

山やまの日は暑あつしといへど秋あきの風かぜ

九月二十四日
蓼たてしな科高原。

山々の男振り見よ甲斐かいの秋

九月二十四日 蓼科高原よりの帰路。

かき濁しくして澄める水

九月二十六日 「玉藻十句集（第三十二回）」

月も亦またとゞむるすべも無かりけり

大空を見廻して月孤なりけり

九月二十六日 観月句会。深沢、三越倶楽部。

黄な蝶のつういと飛べば目路も黄に

十月七日 句謡会。鎌倉、香風園。

風知草女主の居間ならん

十月十日 二百二十日会。赤坂新坂、吉田旅館。

たかあしの膳ぜんに菓子盛り紅葉寺もみじでら

坂少し下りて中堂ちゆうどう薄紅葉

十月十五日 日本探勝会。比叡山本坊貴賓室にて。

秋雨や刻々暮るゝ琵琶びわの湖うみ

十月十六日 琵琶湖ホテルにて。木槿会もくげ。

鳩にがゐるて鳩の海とは昔より

十月十七日 琵琶湖ホテル滞在。

淋しさの故に清水に名をもつけ

十月十七日 幻住庵句会。大津ホトトギス会主催。

思ひ侘^わび此夜寒しと寝まりけり

夜寒さを侘^わびてはなひる許^{ばか}りなり

十月二十三日 「玉藻十句集（第三十三回）」

野を浅くわたりし裾すそに草じらみ

老ぬればあたゝめ酒も猪口一つ

十月二十三日 玉藻俳句会。丸之内倶楽部日本間。

秋風やとある女の或る運命あ さだめ

十月二十四日 銀座探勝会。松屋裏、煉瓦れんが亭。

朝鴟あさむすに掃除夕鴟に掃除かな

十月二十六日 物芽会。上野、梅川亭。

歴史悲し人の訃^ふ悲し秋の雨

十月二十六日 『^{けいとうじん}鷓頭陣』に菊山^{たねお}当年男の寿貞尼の話を讀みて悲し。王
城の訃^ふ到る亦悲し。

^{みぎわ}水際なる^{あし}蘆の一葉も紅葉せり

十月二十七日 鎌倉俳句会。百二十回。片瀬河畔^{しやうよう}逍遙。まささを居。

君と共に^{よんじゆうねん}四十年の秋を見し

十一月二日 王城追悼。

よき衣きぬによるこびつける 草くさ虱しらみ

行く人を待ちてとびつく草虱

十一月六日 玉藻吟行会。鎌倉松ヶ丘、東慶寺。

明治節大帝日ひより和かしこしや

十一月十日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

柴漬ふしづけにまこと消ぬべき小魚こうおかな

十一月十三日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

雨の柚子ゆずとるとて妹いもの姉かぶり

十一月十四日 玉藻例会。日本橋、高島屋。

麦蒔むぎまきやいつまで休む老一人

しまひまで見ずに廻かいじょう状年の暮

十一月十七日 大崎会。丸之内倶楽部特別室。

屏風屋びようぶやの上あがりかまちに老の客

十一月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。

日と月をかゝめげで目出度たし明あけの春

十一月二十五日 偶成。

手毬てまり唄うたかなしきことをうつくしく

十二月一日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

うかくと咲き出でしこの帰り花

後ろにもうつれる人や
初はつかがみ鏡

十二月二日 句謡会。鎌倉、香風園。

老しづかなるは二日も同じこと

梳すきぞめやまなじり眦をつと引きゆがめ

十二月六日 玉藻吟行会。高島屋特別室。

一壺あり破魔矢をさすにところを得

十二月七日 二百二十日会。田中家、
濠人主催。

見送りし仕事の山や年の暮

十二月十四日 七宝会。芝、紅葉館。水竹居主催。

枯草に尚さま／＼の姿あり

高々と枯れ了せたる芒かな

もの皆の枯るゝ見に来よ百花園

十二月十六日 家庭俳句会。 葦城・椎花古稀祝。 百花園、千歳。

そこにあるありあふものを
ほおかむり
 頬被

十二月十九日 銀座探勝会。 西銀座六丁目、滝山ビル、餅喜汁粉屋。

この後の一百年や国の春

十二月十九日 紀元二千六百年。

砂よけの垣あり冬木皆かしぎ

十二月二十二日 鎌倉俳句会。海浜院。

向きくくに羽子はねついてゐる広場かな

羽子板はごいたを口にあてつゝ人を呼ぶ

十二月二十三日 日本橋中洲、福井筒。吉村太一主催。

親心静に落葉見てをりて

某日 深川正一郎曹長を通じて、傷兵達に俳句を奨励する普通寺陸軍病院

長坪倉大佐へ。

霜の楯月の劍に句を守る

十二月二十七日 小田黒潮中佐歓迎会。丸之内倶楽部日本間。

冬籠書齋の天地狭からず

炭斗や個中の天地自ら

十二月二十八日 丸之内倶楽部俳句会忘年会。京橋、万安。

湯婆ゆたんぼの一温何にたとふべき

一日もおろそかならず古曆

十二月二十九日 玉藻忘年会。鎌倉、香風園。

大扉おおとびら今しまりけり除夜詣じよやもうで

十二月三十一日 除夜詣。浅草観音。江の島料理のだや。

昭和十五年

初乗や由井の渚を駒並めて

一月一日

厳かに注連の内てふ言葉あり

凍土につまづきがちの老の冬

羽子板を犬啞へ来し芝生かな

一月八日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

大寒だいかんの埃ほこりの如く人死ぬる

大寒や見舞に行けば死んでをり

悴かじかめる手上げて人を打たんとす

悴める手上げて見て垂たらしけり

一月九日 さみだれ会。日本橋倶楽部。

福寿草遺産といふは蔵書のみ

松過ぎの又も光陰矢の如く

一月十日 玉藻俳句会。高島屋特別室。

万才まんざいの佇たたずみ見るは紙芝居

一月十一日 七宝会。近藤いぬる邸。

寒といふ字に金きん石せきの響ひびきあり

大寒といふといへどもすめらみくに

寒真まなか中高々として産あれし声

悴^{かじ}める手にさし上げぬ火酒の杯^か

一月十二日 草樹会。学士会館。

まろびたる娘^こより転^{ころ}がる手毬^{てまり}かな

万才^{ばんさい}のうしろ姿も恵^え方^{ほう}道^{みち}

なりふりもかまはずなりて著^き膨^{ふく}れて

雑踏^{まじり}や街^{まち}の柳は枯れたれど

一月十三日 二百二十日会。銀茶寮。

照り曇り心のまゝの冬日和

一月十五日 玉藻吟行会。麴町永田町、真下宅。

布団干しながらとまぶね船出るところ

一月十七日 物芽会。品川、洲崎館。

福引に一国を引当てんかな

一月十八日 家庭俳句会。丸之内倶楽部日本間。

春場所の其^{その}横綱の男ぶり

一月十九日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

日についでめぐれる月や水仙花

一月二十三日 「玉藻十句集（第三十六回）」

避寒して世を逃^{のが}るゝに似たるかな

一月二十五日 丸之内倶楽部俳句会。

水仙に春待つ心定まりぬ

一月二十六日 鎌倉俳句会。海浜院。

鎌倉に実朝忌あり美しき

寿福寺はおくつきどころ実朝忌

実朝忌由井の浪音今も高し

二月三日 句謡会。鎌倉、香風園。

又こゝに猫の恋路ときゝながし

二月九日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

桜餅女の会はつゝましく

二月十日 二百二十日会。麴町永田町二丁目、真下宅。

子を抱いて老いたるあま蚕や猫柳

二月十二日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

ものゝ芽や仕事は常に運びゐる

二月十六日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

尼寺めいせつぎに小句会あり鳴雪忌

二月二十日 銀座探勝会。松屋裏、尼寺。

桜餅かご籠無造作に新しき

二月二十一日 物芽会。銀座八丁目、キューペル。

おほどかに日を遮りぬ春の雲

二月二十三日 鎌倉俳句会。たかし庵。

春雪の繽紛として舞ふを見よ

三月一日 家庭俳句会。丸之内倶楽部日本間。

語りつゝ歩々紅梅に歩み寄る

紅梅を折りて挿めばねびまさる

春宵しゅんしょうの此一刻を惜むべし

三月九日 二百二十日会。木挽町、田中家。

窓の灯の消えて綾あやなし春の泥どろ

三月十四日 「玉藻五句集（第三十八回）」

主あるじなき家ながら垣かきくろ繕つくろへり

繕つくろひし垣根かきくろめぐらし隠かくれ栖すむ

三月十五日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

蝶もとびふるさと人もたもとほり

四月三日 玉藻例会。高島屋特別室。

花の宿ならざるはなき都かな

病む子あり花にも一家樂しまず

四月五日 家庭俳句会。あふひ女史追悼。芝公園、花岳院。

櫓火ほだびた焚たき呉くるゝ女はかはりをり

四月七日 夢中に得たる句。

春眠の一句はぐくみつゝありぬ

春眠を起すすべなく見まもれり

春眠やあいたい靨たいとして白きもの

春眠の一ゑまひして美しき

四月八日 笹鳴会。丸之内倶楽部別室。

花散るや鈍な鴉からすの翅はねあたり

四月十一日 七宝会。芝公園、池の端茶店。

やゝ暑く八重の桜の日蔭よし

四月十七日 物芽会。紀尾井町、皆香園。

廻らぬは魂ぬけし風車

四月十八日 丸之内倶楽部俳句会。

ぼうたんによしず葭簣の雨はあられなし

四月二十一日 日本探勝会。横浜三溪園。待春軒に小憩、観月庵にて句会。
 聚楽邸じゅうらくてい北殿の一部臨春閣を見る。

夏山の谷をふとぎし寺の屋根

四月二十六日 鎌倉俳句会。海蔵寺。

妹いもが宿春の驟しゅう雨うに立ち出づる

四月二十七日 二百二十日会。築地三ノ六、築地会館たけはら武原はん方。

牡丹花ぼたんかの雨なやましく晴れんとす

涼しさは下品げほん下生げしやうの仏かな

五月三日 家庭俳句会。

九品くほん仏ぶつ浄真寺。

ゆく春の書に對すれば古人あり

風吹いて暮春の蝶のあわたゞし

五月四日 句謡会。鎌倉、香風園。

浜砂はかなに儂はかなき夢おぐさの小草おぐさかな

五月五日 日本探勝会。小田原、斎藤香村居。

古ふるあわせ裕あわせ著きて軽けい暖だんにをりにけり

喧騒けんそうの蛙かわすの声こゑの中に読よむ

五月八日 玉藻俳句会。高島屋三階特別室。

柏かしわもち餅もち家系い賤やしといふあに非らず

五月九日 七宝会。杉すぎ並なみ大宮八幡遊園地茶店。

牡丹花ぼたんかの面影おもかげのこし崩れくずけり

五月九日 楠目橙黄子くすめとうこうしを悼いたむ。
(五月八日午後三時三十分逝去)。

山里や軒のきの菖蒲しょうぶに雲ゆき

五月十日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

軽暖かろかぜや坐臥ざが進退しんたいも意いのまゝに

五月十六日 深川正一郎歓迎句会。丸之内倶楽部日本間。

買喰かいぐひをして来よと子に 祭まつり錢ぜに

五月十七日 物芽会。
吾妻橋あづまばし俱樂部。

背いの順とに坐り並びぬ 糸取いととり女め

五月十七日 大崎会。
丸之内俱樂部別室。

風折かざり々々汀みぎわのあやめ吹き撓たわめ

五月二十四日 鎌倉俳句会。
材木座光明寺。

頭にて突き上げ覗く夏暖簾のぞ なつのれん

五月三十日 丸之内倶楽部俳句会。

一院の静なるかな 杜若しずか かきつばた

六月五日 玉藻俳句会。高島屋三階特別室。

鯉の水涼しく動きどうしかな

六月九日 日本探勝会。板橋区、豊島園としまえん。

営々と蠅はえを捕とりをり 蠅捕器はえとりき

六月十四日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

羽拔鳥はぬけどり卒然として駈かけりけり

六月二十七日 丸之内倶楽部俳句会。

松の雨ついくと吸ひ蟻地獄ありじごく

六月二十九日 鎌倉俳句会。藤沢遊ゆぎ行寺。

父老健に喜雨又到る安んぜよ

喜雨到る後顧の憂更に無し

六月三十日 大阪放送局より戦線の将士に贈る俳句といふを徴されて。

大木の幹に纏ひて夏の影

七月七日 東子房・小葛結婚披露俳句会。愛宕山、嵯峨野。

雷雲に卷かれ来りし小鳥かな

八月三日 富士山麓山中湖畔草廬。

秋風の俄に荒し山の庵

八月七日 富士山麓山中湖畔草廬。

門前の坂に名附けん秋の風

八月八日 富士山麓山中湖畔草廬。

朔北の秋風に意を強うする

八月十六日 哈爾濱俳句大会に寄す。

旅の秋寝間著ねまきになりて又まとる

八月十七日 句謡会。元箱根、松坂屋。

霧の中小鳥頻しきりに渡りけり

われまされない吾も亦紅なりとついと出いで

九月四日 玉藻例会。高島屋特別室。

徳川の三百年の夏木あり

世智せちがら辛うきよばなしき浮世咄かどすずや門涼み

九月六日 家庭俳句会。上野、梅川亭。

秋あきさめ雨あきさめやほそ／＼ながら続く会

九月七日 句謡会。鎌倉、香風園。

秋風や相黙したるな汝れと吾われ

九月九日 笹鳴会。丸之内倶楽部別室。

衰へし野分に鴉一羽飛び

九月十八日 物芽会。百花園。

我命つゞく限りの夜長かな

九月二十日 「玉藻五句集（第四十四回）」

なつかしや花野に生ふる一つ松

九月二十日 大崎会。丸之内俱樂部特別室。

秋風や相逢はざるも亦よろし

九月二十四日 藤崎完より漢詩一篇を贈り来りしに返す。山中湖畔草廬。

名をへくそかづらとぞいふ花盛り

九月二十九日 日本探勝会。上野、寛永寺。

爪^{つま}立てをして手を上げて秋高し

高原に立ちはだかりて秋高し

十月八日 二百二十日会。木挽町、灘万。奈王招待。

秋風に吹かれ白らめる面おもてかな

十月九日 玉藻俳句会。高島屋特別室。

荷船にも釣る人ありて鯨はぜの潮

十月十一日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

芋の葉のいやく合がてん点々がてんかな

十月十二日 句謡会。鎌倉、香風園。

刈らるゝを待つ枯萩かれはぎの風情ふせいかな

十月十四日 笹鳴会。丸之内倶楽部特別室。

大杉に隠れて御堂みどう秋の風

十月十九日 京都鷹ヶ峰光悦寺、王城句碑除幕式。万竹堂にて句会。妻子を伴ふ。

秋の海荒るゝといふも少しばかり

拝謁や菊花の階を恐懼きょうくして

拝謁を賜りければ菊の花

御船みふね今静しずかに進む夜長かな

十月二十四日 別府亀の井を出て乗船。船中。

秋風や心激して口吃どもる

十月三十一日 丸之内倶楽部俳句会。

秋晴や心ゆるめば曇るべし

十一月一日 家庭俳句会。丸之内倶楽部別室。

吾も老いぬ汝も老いけり大根馬

十一月八日 玉藻俳句会。渋谷道玄坂上、二葉。

初時雨あるべき空を見上げつゝ

十一月八日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

金^{きん}屏^{びょう}に高^{たか}御座^{みくら}あり 出^{しゅつ}御^{ぎよ}まだ

出^{しゅつ}御^{ぎよ}今^{いま}二千六百年天高し

十一月十日 紀元二千六百年式典に参列。

老い朽ちて子供の友や大根馬

嘶^{いな}きてよき機嫌^{きげん}なり大根馬

十一月十二日 二百二十日会。銀座六丁目、実花宅。

大石に這^はひ寄りかゝる小菊かな

十一月十四日

七宝会。

向^{むこう}島^{しま}、百花園。

冬ぬくし老の心も華^{はな}やぎて

十一月十六日

大崎会。

丸之内俱樂部別室。

供へ置きし柿たうべばやと思ひけり

十一月十九日

銀座探勝会。

松屋裏、

尼寺。

籠^{かご}負ひて焚^{たきび}火煙に現れ来

立ち昇^{のぼ}る茶^{ちやわん}碗^{わん}の湯^{ゆげ}気の紅^{もみじ}葉^は晴

よろ／＼と棹^{さお}かのぼりて柿^{はぎ}挟む

十一月二十二日 鎌倉俳句会。たかし庵。

墨の線一つ走りて冬の空

雲なきに時^{しぐれ}雨を落す空が好き

十一月二十八日 丸之内倶楽部俳句会。

立ち昇る炊煙の上に帰り花

十一月二十八日 「玉藻五句集（第四十六回）」

おでんやを立ち出でしより低唱す

十二月六日 家庭俳句会。日比谷公園。

時雨^{しぐ}ゝを仰げる人の眉目^{びつめく}かな

十二月七日 句謡会。鎌倉、香風園。

草枯るゝ日数を眺め来りけり

十二月九日 笹鳴会。丸之内倶楽部別室。

羽搏はばたきて覚さめもやらざる浮寝うきねどり鳥

十二月十日 二百二十日会。木挽町、田中家。

大仏に到りつきたる時雨かな

十二月十二日 七宝会。鎌倉大仏、南浦園。

鑿々とうとうと昇り来りし初日かな

十二月十三日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

マスクして我を見る目の遠くより

我が生は淋しからずや日記買ふ

靴かばんさげ時雨るゝ都と見みかう見み

十二月十七日 銀座探勝会。東京朝日新聞社向側、ニユー・トウキョウ。

橋をゆく人ことごと悉く息白し

十二月十八日 物芽会。浅草山内、岡田。

年忘れ老は淋しく笑えまひをり

うち笑める眉目ひい秀で、マスクかな

十二月二十日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

懐ふと手ころでして人込みにもまれをり

懐手して洛陽らくようの市にあり

懐手して俳諧の徒輩たり

懐手して論難に對しをり

懐手して宰相うづわの器たり

左手は無きが如くに懐手

十二月二十六日 丸之内倶楽部俳句会。赤坂永田町二ノ七、待月荘。

さまよへる風はあれども日向ひなたぼこ

美しく耕しありぬ冬菜畑ふゆなはた

冬日濃しなべて生きとし生けるもの

十二月二十七日 鎌倉俳句会。海浜ホテル。

北風到人細り行き曲り消え

十二月三十日 東京句謡会。丸之内倶楽部日本間。

神前の落葉掃く賤相しずついで

十二月三十一日 信濃神社しなのは宗良親王むねながを祀まつる。奉納の句を徴さる。

伏して思ふおぼろおぼろ朧々おぼろの昔かな

十二月三十一日 霧島神社奉納句を徴さる。

伸び上り高く抛ほうりぬ 札ふだ納おさめ

人顔はやうやく見えじよやもうでず除夜詣

十二月三十一日 除夜詣句会。
浅草寺境内、江の島料理。

青空文庫情報

底本：「虚子五句集（上）」〔全2冊〕、岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年9月17日第1刷発行

底本の親本：「五百五十句」櫻井書店

1947（昭和22）年11月5日再版

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「吾《わ》」と「吾《われ》」と「吾《わ》れ」、「汝《なんじ》」と「汝《なれ》」と「汝《な》れ」の混在は、底本通りです。

※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。

※「序」の末尾の「註」は親本の初版に存在し、再版には存在しませんが、底本通りとしました。

入力：岡村和彦

校正：酒井和郎

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五百五十句

高浜虚子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>